

目次

序章	3
0.1 研究の背景・目的・構成	3
0.2 先行研究	4
第1章 間接的表現について	7
1.1 間接的表現	7
1.1.1 定義	7
1.1.2 意義	10
1.2 間接的表現の伝達	13
第2章 間接的感情表現について	17
2.1 間接的感情表現	17
2.1.1 定義	17
2.1.2 意義	19
2.2 間接的感情表現の伝達	22
第3章 間接的感情表現に関する考察	25
3.1 考察に使用するサンプルについて	25
3.2 仮説1に対する考察	26
3.2.1 間接的感情表現の消極利用	26
3.2.2 間接的感情表現の積極利用	36

3.3 仮説 2 に対する考察.....	43
3.3.1 伝達成功の場合.....	44
3.3.2 伝達失敗の場合.....	44
第 4 章 結論.....	52
参考文献.....	54
参考資料.....	55
要約.....	56

序章

0.1 研究の背景・目的・構成

感情を言葉にのせて表現するということは想像以上に難しいことである。我々は日々、無数に存在する言葉の中から適当だと思われる語句を選択し、それらを組み合わせ、ひとつの言語表現を生み出すことで自分の思いや考えを外部へと発信している。例えば、「嬉しい」という感情を伝える場合、その表現方法は何通りも考えることができる。そのまま「嬉しい」と明言することもひとつの方法である。一方、「いまなら死んでもいい」といったように、一見、「嬉しい」という感情とは全く関係のないような言葉でその感情を表すこともできる。

このように、あえて単純な表現を使わずに自分の感情を伝える場合、そこにはただ「嬉しい」と言う場合には発生しなかったリスクが発生する。つまり、状況や文脈、そして伝達する相手によっては伝えたいことが正確に伝わらない可能性が生じるのである。そこで本稿では、あえて明言を避けた感情を表す表現（のちにこれを間接的感情表現と定義する。）について、以下のような仮説を立て、これらを検証することで研究を進めていく。

仮説 1 :

間接的感情表現は積極利用よりも消極利用の方が意義に適った

利用方法である。

仮説 2 :

間接的感情表現の伝達の成否には受信者が事前に持つ発話者への印象が強く影響している。

また、本稿の構成は次の通りである。第 1 章では明言を避けた表現（のちに間接的表現と定義する。）について、その種類や特徴、伝達の背景に関する各論を参照する。第 2 章では間接的感情表現について、その定義や意義を明確にし、上記の仮説を立てるに至った考察過程を述べる。第 3 章では序章で提示した仮説に対して創作物から採取したサンプルを活用することで検証を行い、その結論を第 4 章で述べる。

0.2 先行研究

一口に間接的な表現といえども、その様式や表現方法は無数に存在するということを前節で述べたが、それらについて論じてきた研究者もまた数多く存在する。ここでは、実際の研究に入る前に、過去に行われてきた研究をいくつか参照する。

まず、大前提として、このような直接的でない、間接的な表現を中心に扱っている語用論という言語学の分野について触れてお

きたい。言葉を字義通りに解釈し、表意を理解することに重きを置いている意味論に対して、語用論では字義通りではない、言外に含められた意味、すなわち推意を理解することに重きを置いている。語用論という分野を本格的に開いたオースティンは、「ことばの役割は、出来事や態度を叙述することだけにあるのではなく、『行為である』場合もある」（今井（2015））という点に着目し、「言語行為理論」を唱えた。これによりオースティンは、叙述文に加え、命令文や疑問文についても発話すること自体が何らかの行為を遂行したことになる¹可能性や発話によって受信者に何かしらの効果を与えている²可能性があると言及した。また、このようなオースティンの考えを応用し、サルトルやバンダーベーケン³は比喩表現や皮肉表現、間接的言語行為といった現在の語用論でも中心的に取り扱われるような非字義的発話内行為の可能性を見出した。その後、グライスが発話の解釈には「推論」が必要不可欠であるという主張を行い、「会話の含意」という概念が語用論分野に初めて導入された。この、含意を推論するという発話の理解過程を支えるものが同じくグライスの唱えた「協調の原則」である。これは量・質・関係・様態という4つのカテゴリにおいて、発話者と受信者はこれらの格率を原則守り、互いに協力することによって会話を成り立たせているとするというものである。さらに、スペルベ

¹ これを「発話内行為」という。

² これを「発話媒介行為」という。

ル&ウィルソンはグライスが着目した、含意を推論せねばならないような発話が生じる理由として「関連性理論」という新たな論を提唱した。これは発話者が受信者の理解に負担をかけるような発話をする際、その発話には受信者の負担に見合うだけの高い情報価値がある³ということを発話者・受信者がともに会話の前提としているという論であり、これをあえて間接的な発話を行う理由としている。

このように語用論の歴史を簡潔にまとめたが、過去にはこれらの理論をもとにした研究が言語学はもちろん、脳科学や心理学、さらには広告学といったさまざまな角度からなされている。しかし、感情表現に特化し、感情を含む間接的な表現の利用や伝達という側面に迫っているものは見つけることができなかった。このことから、今回の研究には独自性があり、行う意味のあるものであると言えるであろう。

³ こういった状態を「文脈効果がある」という。

第1章 間接的表現について

ここではまず、本稿で取り上げる対象とする表現の範囲を以下で定め、ここで言う「間接的表現」が一体どのような表現のことを指しているのかを明確にする。また、発話者がその表現を利用する意義についても共に考察する。

1.1 間接的表現

1.1.1 定義

前章の先行理論・研究をふまえ、本稿では、間接的表現という語句を次のように定義づける。

間接的表現：

字義通りではない、文脈依存した意味を含意している表現。

ただし、その中でも、慣用表現やそれに準ずる表現は除外する。

では、具体的にどのような表現がこの定義に当てはまっているのか、小泉（2001）を参考に例を挙げると以下のようなになる。

a) 協調の原則

(1) A: Where's Bill?

B: There's a yellow VW outside Sue's house.

(Levinson (1983))

(2) Queen Victoria was made of iron.

(Levinson (1983))

(3) (Xに裏切られたのちの発話) X is a fine friend.

(Grice (1989))

まず (1) について、一見、この B の発話は A の問いに対し、まったく関係のないことを返しているように見える。しかし、グライスによる協調の原則をもとに、文字通りの意味ではなく会話の含意をくみ取れば、B は A の「ビルはどこにいるか？」という問いに対し、「ビルはスーの家にいる」という的確な内容を返していることが分かる。ただし、この推意を生じさせるには「ビルは黄色の VW に乗っている」という情報が発話者・受信者の両者間で共有されていることが必要不可欠となる。

次に (2) について、これは協調の原則のひとつである質の公理をあえて破ることによって表された比喻表現である。人間が鉄からできている、という根拠のないことを発話することによってこれが一種の比喻であることを示唆している。

また、(3) について、これは発話者が仕事上の重要な機密情報を X

によってライバル会社へ漏えいされ、また、そのことについて周囲もすでに知っているという場面でみられた発話である。これもまた(2)と同様に、質の公理を破ることで皮肉表現を作り出している。

b) 前提

(4) My cousin is a bachelor.

(小泉 (2001))

この(4)は前提情報によって、字義通りの意味だけでない別の意味も同時にくみ取ることができるという文章例である。この bachelor という単語は元々、「未婚」「成人」「男性」という意味を持ち合わせている。そのため、この文章からは字義通り、「私のいところは独身である」という意味以外にも「私のいところは男性である」「私のいところは成人している」といった意味までくみ取ることができる。

c) 間接的言語行為

(5) この部屋は寒いね。

(6) a. 窓を閉めてくれないか。

b. ドアを閉めてくれないか。

c. 暖房を入れてくれないか。

(小泉 (2001))

これは間接的言語行為と言われる発話の例である。(5)の発話は一見、部屋の状況をただ述べているようにもとれるが、実際の日常会話におけるこういった発話は(6)に挙げたような要請を含んでおり、受信者はその場の状況からの確な要請内容を判断し、くみ取る必要がある。

このように、語用論で取り扱われる間接的表現にはさまざまな種類のものが存在しているが、上記の通り、比喩表現や皮肉表現、間接的言語行為等その実態は日常の会話においてもよく耳にするものばかりである。ここでは、そういった普段何気なく使われているような表現に着目し、研究の題材として扱っていく。

1.1.2 意義

前項では、本稿で取り上げる間接的表現について、その具体例を挙げることで定義を明確に提示してきた。しかし、このように受信者が理解するのに労力を要するような表現を利用する発話者の意図は一体どこにあるのであろうか。ここでは、以下のように間接的表現の意義を捉える。

a) 発話の取り消しができる

(7) (A と B は姉妹、A = 妹・B = 姉)

A: Did you get your velvet jacket back from the cleaners?

B: You're not borrowing it.

A: I don't want to borrow it. I just wondered you'd got it
back.

(Thomas (1995))

例えば、こちらの (7) の例を見てほしい。A は最初の発話において B の所有物であるベルベットのジャケットがクリーニングから返ってきているのかを気にしており、おそらくこれは B にジャケットを貸してほしいがための発話であるということが容易に推測できる。しかし、それを察した B が「借りるつもりではないでしょうね」と先手を打つと、A は即座に B の推意を否定している。このように、あえて明言することを避け、相手に推意を汲み取らせるような間接的な発話をすることで後々自分に不都合な会話展開になった場合においてもその推意を自ら否定することができるというわけである。

b) フェイス侵害を回避している

ここでいう「フェイス」とは「ポライトネス理論」における重要な概念であり、この理論を唱える中心的人物であるブラウン&レヴィンソン（2011, 田中訳）は以下のように定義している。

「フェイス」(face)。すべての構成員⁴が自分のために要求したいと願う公的な自己イメージで、以下の2つの関連する側面に存在する。

- (a) ネガティブ・フェイス：縄張り、個人的領分、邪魔されない権利——つまり、行動の自由と負担からの自由——に対する基本的欲求
- (b) ポジティブ・フェイス：相互行為者 (interactants) が求める肯定的な、一貫したイメージ、つまり「人格」(personality) (重要なのは、この自己イメージが評価され、好ましく思われたいという欲求を含んでいることである)

つまり、フェイスとは人間が各々掲げている自らの理想的な状態のことであり、人々は常に周囲からフェイスを侵害されないように、または肯定されるように欲しているのである。ここでは前者の、フェイ

⁴ 構成員とは「社会のすべての能力ある成人構成員」のことである。(同書同ページより)

スを侵害されないように願う欲求、すなわちネガティブ・フェイスに着目し、直接的な表現を利用するよりも間接的な表現を利用する方が相手の反応から受ける衝撃を抑えられる可能性があるという点で間接的な表現を用いる理由として位置付ける。

c) 情報伝達の効率化を図っている

先述の、協調の原則についての項で取り上げた (1) の B の発話に着目してほしい。A がビルの居場所を B に聞いた際、B はあえてああいって発話をすることによって、ビルがスーの家にいるという情報だけでなく、ビルはスーの家に車で来ているという自分が知っている情報のすべてを A に伝えることができている。このように、受信者には直接的な表現での発話と比べると理解により負担をかけるが、その負担に見合った分の情報を表現に含めることができるという点も間接的表現の意義のひとつであると考えられる。なお、これは 0.2 で触れたスペルベル&ウィルソンの唱えた関連性理論に基づく考え方である。

1.2 間接的表現の伝達

1.1 では間接的表現とはいったいどういったものであるのかについて、その概要に迫った。この節では、前節の内容を踏まえ、間接的表

現の伝達という側面に着目したい。

間接的表現とはその名の通り、表し方が直接的でなく、字義通りの解釈では発話者の意図を正確に理解することが難しい表現のことを指している。そのため、この表現を発話者の思う通りに理解するには、受信者が発話者とともに、ある一定の能力を持っていることが必要不可欠となっている。大堀（2004）では、発話者・受信者が共通して持つべきものに推論する能力を挙げており、「観察される事実をもとにその場にふさわしいやり方で相手の意図をはかること」が重要であると述べている。また、言語以外の面において推論に深く関わるものとして、①いわゆる常識にあたるような一般的知識、②特定の発話者・受信者にのみ適用される個別的知識、③個々の価値判断の背景である文化コンテキストの3点が挙げられている。以上の内容を踏まえると、①～③で示したものを両者間で共有することによって、方向性の正しい推論が遂行され、結果として発話者の意図した内容が的確に受信者に理解されるという間接的表現の伝達成功のパターンが考えられる。また、このような間接的表現の理解過程を視覚的に表すと以下の図1のようになる。

また、岡本（2013）にも、円滑なコミュニケーションに必要なものは共通の基盤であるといった内容の記述があり、それを確立させるための手がかりにするものとして次の3つを挙げている。ひとつは「会

話が行われている物理的な状況」である。これは言語以外の環境要素が発話理解に影響を与えているということを指している。次に「先行する会話」である。例えば、発話の中に指示詞が使われている場合、受信者はそれに先行している発話を思い返すというわけである。最後に「共同社会の成員性」である。これは相手と自分のコミュニティを考慮すると、自分と相手が共有している常識や知識といった発話理解のための前提情報に対してある程度の予測をつけることができるということを述べている。

このように、両者の論を踏まえると、間接的表現の伝達には発話者・受信者に共通の文脈が必要不可欠であり、伝達を円滑に成功させるにはお互いにその文脈を意識することが重要であるということが言える。

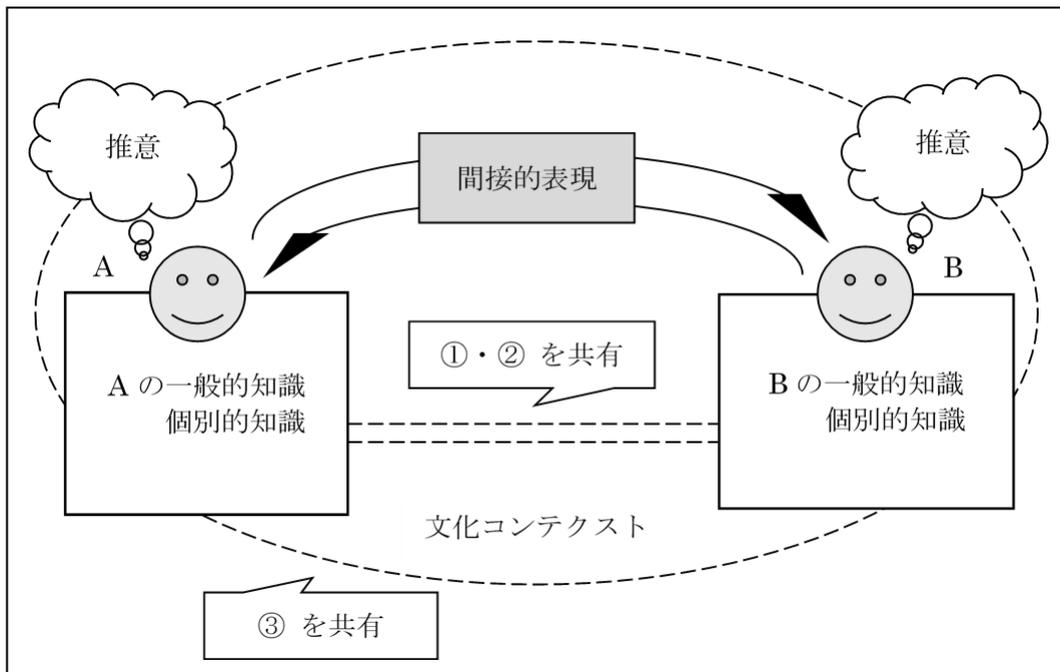


図 1：間接的表現の理解過程（大堀（2004）を一部改変）

第2章 間接的感情表現について

前章では間接的表現について、その概要を述べた。ここでは、その中でも感情を伝達する表現のみを限定して取り上げ、題目にもあるように間接的感情表現の伝達についてさらに詳しく迫っていく。

2.1 間接的感情表現

2.1.1 定義

本稿では、間接的感情表現という語句を次のように定義づける。

間接的感情表現：

前章で定義した間接的表現のうち、感情を伝達する表現。

また、今回の研究にあたり、取り扱う感情は中村（1993）の『感情表現辞典』を参考に、以下の10のカテゴリに分類して捉える。

1. 喜：めでたい、うれしい、満足、楽しい、快
2. 怒：立腹、憤る、癪、不機嫌
3. 哀：悲しい、泣く、哀れ、淋しい、むなしい
4. 怖：こわい、心細い
5. 恥：恥ずかしい

6. 好：愛しい、恋しい、あこがれる、好き、なつかしい
7. 厭：嫌、憎い、悔しい、困る、憂鬱、しょげる、苦しい
8. 昂：あせる、いらいら、緊張、興奮、感動
9. 安：ほっとする、平然、気楽
10. 驚：びっくり、ショック、面くらう、呆然、意外

つまり、これらの 10 のカテゴリに属する感情を含んでおり、かつ「嬉しい」「悔しい」というように直接的な形式で表現されていないものをここでは「間接的感情表現」として扱っていくということである。では、実際にどういったものがこの定義に当てはまるのか、具体的な例を挙げると以下のようなになる。

〔例〕 智史「美咲さんは、永久に生きてみたい？」

美咲「難しい問題ですね。ゆっくり考えてみないと」

智史「うん」

美咲「一生かかって考えてみます⁵」

智史「そう？」

⁵ 下線部が対象としている表現を、波線部が表現に伴って見受けられた反応・効果を示している。

美咲「ええ。答えが出たとき、また訊いてくれますか？」

智史「いいですよ」

深く考えずそう答えて、少し顔を赤らめて俯く彼女の仕草で、
はっと気付いた。なにか、すごく深い意味のある言葉だったよ
うな気がする。

(市川、p. 152)

この例では、美咲の発言内に智史との将来を前向きに考えているという彼への好意を匂わせるような表現が見られる。また、会話文直後の地の文からは智史が美咲の発話内容の意図に気付いたことが分かる。このように、発話者が何らかの感情を受信者に伝達しようとしている表現を研究題材とし、こうした表現を選択する意義や効果、伝達の成否の条件について分析・考察を行う。

2.1.2 意義

前項では、造語である間接的感情表現がどのようなものを指しているのかについて、実際に具体例を挙げつつ定義を示した。しかし、間接的表現と同様、これらの表現は直接的な表現と比べ、理解に対する受信者の労力が大きくなることは間違いない。加えて、発話者の意図が的確に受信者へと伝達される可能性も低下するという伝達失敗の

リスクを含む選択であるとも言える。発話者はなぜ、このようにさまざまな難点を抱えた間接的感情表現を選択し、利用するのか。ここでは、1.1.2で述べた間接的表現の意義を参考にしつつ、間接的感情表現の意義について考える。

本稿では間接的表現の意義について、以下の3点を取り上げた。

- a) 発話の取り消しができる
- b) フェイス侵害を回避している
- c) 情報伝達の効率化を図っている

まず、cについて、これは本稿で考える間接的感情表現の意義には適していないものであると考えられる。なぜなら、感情を効率的に伝えるのであれば直接的に表現する方法が最適であるからだ。したがって、a・bの内容に限って参考にとすると、間接的感情表現も間接的表現と同様に、自分が断言して伝えづらい内容や、相手の反応に自らのフェイスが侵害される可能性が高い内容を伝達する際に利用されやすいのではないかと考えることができる。さらに、感情を含んだ表現であることに着目すると、通常の発話に比べ、発話者は自らの感情を含ませた発話が相手の心情にどのような影響を与える可能性があるのか、より綿密に発話後の想定をしたうえで発話に至ることも予想される。そ

のため、相手の心情を大きく揺るがすような発話であると事前に予測した場合、発話者は間接的な表現に走りやすいのではないかと考えることができる。

以上より、本稿では 0.1 で述べたように「間接的感情表現は積極利用よりも消極利用の方が意義に適った利用方法である。」という仮説を立てる。つまり、発話者があえてその表現を選択し、利用する「積極利用」の例よりも、発話者が直接的な表現を避けたいがために利用する「消極利用」の例の方がより意義に沿った利用方法ではないかと考えるのである。

では、ここで改めて、本稿で言う間接的感情表現の積極利用・消極利用について、それぞれの定義を示す。

間接的感情表現の積極利用：

直接的な表現を選ぶ余地もある中で、発話者が能動的にその表現を選択し、利用している場合を指す。自らの感情をより明確に相手に伝えるために比喩表現を使う場合や、相手を狡猾に攻撃する目的で皮肉表現を使う場合等が該当する。

間接的感情表現の消極利用：

直接的な表現を避けるために、発話者が受動的にその表現を利用している場合を指す。積極利用の例で挙げた比喻表現や皮肉表現の中でも、自らのフェイスを侵害されることを恐れ、断言を避けるために使用された場合はこちらに該当する。

また、今回は検証するサンプルを創作物に限定しているため、発話者の発話前の心境や発話を受けた受信者の心境等、日常の会話では見ることのできない部分を地の文の描写から客観的に捉えることで表現を積極利用・消極利用の2つの場合に振り分ける根拠にしたいと考えている。分析対象に創作物を取り扱った研究の中には、山岸(2007)のように小説の描写から自らが解釈したことを考察に使用しているものも少なからず存在する。したがって、本稿も小説の描写に基づいて解釈されうる内容を手がかりにしながら考察を行う。

2.2 間接的感情表現の伝達

2.1 では間接的感情表現について、定義や意義といった観点からその概要に迫った。この節では、観点を「伝達」という点に変え、1.2 で取り上げた間接的表現の伝達についての論を参考にしつつ、間接的

感情表現の伝達について考えていく。

まず、本稿ですでに述べた間接的表現の伝達に関する論を振り返りたい。1.2では、間接的表現に含まれる発話者の意図を受信者が的確に理解するためには、両者が持つ知識や文化コンテクストを共有し、共通の基盤を作ったうえで発話行為・解釈行為を行うことが重要であると述べた。しかし、ここで取り上げているものは間接的感情表現である。つまり、感情を含んでいることで先述した間接的表現の伝達様式とは異なる注意点が存在する可能性があると考えられる。

そこで、感情研究の見地から論を展開する北村（2006）を参照すると、感情経験というものは元々、個々の身体という基盤に支えられているものであるため、その感情を言語化した表現は一般的な事柄を述べる表現より客観性が低くなるといった内容の記述がある。これを考慮すると、感情を含んだ間接的表現は一般の間接的表現よりも主観的な内容になりがちであり、それ故に受信者が発話者自身を理解している度合いによって表現の解釈が大きく変化する可能性があるのではないかという説が導き出せる。つまり、受信者が元々持ち合わせた発話者への印象が間接的感情表現の伝達の成否に大きく影響してくるということが考えられるのである。

以上より、0.2で挙げたもうひとつの仮説である「間接的感情表現の伝達の成否には受信者が事前に持つ発話者への印象が強く影響し

ている。」という考えを導き出した。

第3章 間接的感情表現に関する考察

本章では、第1章・第2章で論じた内容をふまえ、第2章で掲げた仮説について実際にサンプルを用い、検証・考察を行う。

3.1 考察に使用するサンプルについて

本稿では序章や第2章でも触れた通り、創作物からサンプルを採取して考察に使用する。また、今回は採取してきたサンプルを考察するツールのひとつとして以下のような表を利用していく。

関係性：①	感情：③
場面：②	伝達：④

まず左上①では、取り上げるサンプルの会話内に登場するふたりの話者の関係性を表記する。次に、左下②では会話がどのようなタイミング・場所・時間で行われているものであるのかを表記する。また、右上③ではサンプルの間接的感情表現がどのような感情を伝達しようとしているのかを2.1.1でも参照した中村（1993）の10の区分を利用し、表記する。最後に、右下④では発話者が伝達したいと考えた感情（右上③）が受信者に正確に伝わっているのかどうかを地の文や波線部⁶の言動を参考に判断し、○/△/×の三段階で表記する。

⁶ 波線部の定義は p. 18 の注 5 を参照してほしい。

また、今回取り上げるサンプルには疑問文の形態が多くみられた。疑問文の基本的な役割は相手に情報を要求することであるが、例えば安達（1999）のように、情報要求ではなく情報提供をする疑問文について研究したのも過去に存在しており、今回のサンプルに見られる疑問文もこちらの傾向が強い。つまり、形態は疑問文の体を成しているが、単に相手からの情報を求めて問いかけているものばかりではないということである。この点にも着目した上で、次節からは実際にサンプルを使用した分析に進む。

3.2 仮説 1 に対する考察

3.2.1 間接的感情表現の消極利用

2.1.2 では、序章で掲げた〔仮説 1：間接的感情表現は積極利用よりも消極利用の方が意義に適った利用方法である。〕といった考えに至った理由として、間接的感情表現は自分が断言して伝えづらい内容や、相手の反応に自らのフェイスが侵害される可能性が高い内容を伝達する際に利用されやすいという可能性を挙げた。では、実際に消極利用のサンプルにどういったものが見られるのか、以下で考察を交えつつ提示していく。

(8) 由希「地元でやるクラス会とか結婚式って、正直肩身狭いもん。

感じることはない？」

聡美「どういうこと？由希」

話がどこに流れていこうとしているのか。それを悟り、わか
ってはいるけれど、微かに首を傾げてみせる。

宴もたけなわとなったクラス会は、個室のそこかしこで小さな島のようにいくつもグループが出来上がっていた。その中には、数はいつもより少ないものの、地元からの参加者だっている。しかも、聞かれたら相当に厄介なことになりそうな人間も
来ている。

視線を向けると、彼女らは奥にいた。(中略) 幸いこちらに気付く様子はない。

「何よー」と、由希がアルコールが入っていることを露骨にアピールするように、また甘えた声を出す。

酒の席なんだから許してよ、しかも、今自分が呼びかけているここにその対象者はいないのだから。ささやかな毒をはらんだ遊びなのだと、訴えるように。

関係性：	感情：
同性の元クラスメイト	怖（こわい）、昂（あせる）
場面：東京での同窓会	伝達：○

まず、最初に取り上げるものは、あえて自分の口から断言することを避けている消極利用の例である。(8)の例では、由希が地元暮らしの同窓会参加者を敵にまわすような発言をし、それについて聡美に同意を求めている。聡美も内心では由希の発言に同意しており、どういったことが言いたいのか、その後の話の流れも予想がついていると聡美の発言直後の波線部から読み取ることができる。しかし、あえて断言的な同意の言葉は発さず、由希に話の真意を問いかけ、彼女の口から続きを話すように促すことで、万一地元からの参加者にこの会話を聞かれたとしても自分の立場が悪くならないようにしているのであろうことが分かる。また、波線がひかれている「何よー」という由希の発言やその後の地の文からは、由希は自分が一定の層に対する悪口を言っていることを自覚しており、それに加担したくないがために聡美が断言を避けたことにも気付いているということが読み取れる。つまり、この聡美の発した間接的感情表現は伝達に成功していると言えるのである。

(9) 今度こそ、ジェイの表情が凍りつくのが分かった。

ヨハンは自分の話に自信を覚える。

ヨハン「君はわざとあの上級生の前で、喘息の薬の瓶を見せた
ね？」

ジェイ「なぜそんなことをしなきゃならないんだい？」

ようやくジェイが口を開いた。その口調は落ち着き払って
いる。

ヨハンは小さく笑った。

ヨハン「その理由は二つある。一つは、あの上級生に君が締め
上げられるため。もう一つは、君の薬の瓶に毒が入っ
ていたと思わせるため」

ジェイは処置なしというように小さく首を左右に振った。

ジェイ「言っている意味がよく分からないな。僕にも分かるよ
うに説明してくれないか」

ヨハン「そうか。じゃあ説明しよう」

ヨハンはおどけた口調で口を開いた。

関係性：同性の友人	感情：昂（あせる）
場面： 悪事を暴こうとしている	伝達：○

（恩田（ii）、p. 47-48）

(9) も (8) と同様に、自分の口から断言することを避けている例である。この場面では、ジェイは自らが起こした悪事についてヨハンに問い詰められており、ヨハンからの問いかけに対して肯定もしくは否定の意を示すべきところにおいて新たな問いかけを返すという形で間接的感情表現の消極利用をしている。これは、例え自分の犯した罪が相手にすでに探られ、事実を知られていたとしても、自分から断言して認めないうちはしらを切れる可能性があるかもしれないというわずかな望みにかけて口からついた発話であると考えることができる。また、波線を引いたヨハンの言動からは、ジェイが罪を認めたくないために決定打を先延ばしにしているということにヨハンも気付いていることが読み取れる。

(10) 樹 「なんでこんな時間に俺のバイト先なんて来てんだよ！

しかも歩きでなんて！」

さやか「あたしの勝手でしょ！？ 日下部さんには関係ないでし

よ！？」

イツキが苛立ったような溜息をついた。さやかと同居して初めて聞くような。

樹 「……何が言いたいわけ」

さやか「あたしは知らなかったイツキの苗字、彼女は知ってた。

あたしには、言いたくないって言わなかった」

(中略)

樹 「……だから何なの」

(中略)

樹 「そんな話ならしてる暇ない。十分しかもらってないんだ」

(中略)

初めて聞く怖い声を残して、イツキは走り去った。その後ろ姿は見られなかった。恐くて——顔が上げられなかった。

関係性：お互いに片思いの男女	感情：怒（憤る、不機嫌）
場面： バイト中に抜け出して喧嘩	伝達：○

(有川、p. 207)

また、(10)も(9)のように自分にとって都合の悪い事実を突きつけられた際に出た間接的感情表現の例である。ただし、(9)と異なるのは発話者がその事実を認めたいという点である。

(9)の例では、相手に言われたことに対して、あくまで自分はそれが事実だと認めてはいないという体を貫き、表現を利用していたが、

この例は相手に言われたことは認めてはいるが肯定の言葉を断言することは避けたいという利用の形をとっている。取り上げた会話内にもあるように、樹がさやかに対して自分の苗字を意図的に隠していたことはふたりの間では共通概念であり、さやかがその点を遠回しに責めた時にはすでに樹自身もさやかに対して後ろめたさを感じていたことからこういった会話になったのだと考えることができる。

このように、(8)～(10)の例から、消極利用の中にはあえて断言を避けることで、自分の立場を守ったり体裁を整えたりするという保身目的の表現があることが判明した。また、こういった使用の場合、表現に含まれる感情はいずれも恐れや焦りといった負の感情であるということも分かった。

(11) そして亮は、まっすぐに前を向いたまま、ひとつ咳払いをし、

声のトーンを整えた。

亮 「思うんだけど」

理沙子 「ええ」

亮 「僕たち、そろそろ両親を安心させてあげてもいいんじ

ゃないか？」

理沙子は顔を向けた。亮の横顔が、ウィンドウから差し込む光に包まれている。とても大切なことを言われたのかもしれない

い、と感じたのは、車がウィンカーを出して大通りに出てから
だった。

理沙子「それ、もしかして……？」

亮 「ああ、そうだよ。僕はずっと結婚を前提に理沙子と付
き合ってきたつもりだよ。理沙子は違うのか？」

理沙子「ううん、もちろん私だってそうよ」

関係性： 長年付き合ってきた恋人	感情：昂（緊張）
場面：デート中の車の中	伝達：○

（唯川、p. 92）

では、次に、消極利用の中でも発話者が自らのフェイスを侵害されないように間接的感情表現を用いている例を取り上げる。(11)について、表左上の関係性の項目にもあるように、このふたりは作中において長年の付き合いである。取り上げた場面以外でも互いの両親の家に定期的に顔を出しに行く等、結婚を前提とした交際をしていることはもはやふたりの共通概念であったことが予想される。これに関しては実際に会話の最後のあたりでも言及があるため、この共通概念が伝

達の成功に影響を与えていることは間違いないだろう。しかし、ここまでの前提があるのであれば直接的に「そろそろ結婚しないか」といった表現を用いてもよかったはずである。ここで冒頭の「咳払い」「声のトーンを整えた」という地の文をみると、発話者である亮はいささか緊張した心持ちであったことが読み取れ、この感情が間接的感情表現の利用を引き起こしたのだと言える。つまり、亮は万が一の断られるリスクに備え、後から発話を取り消せる間接的表現を利用することで、自らのフェイスが侵害される可能性を可能な限り低く抑えたのである。

(12) 智史「美咲さんは、永久に生きてみたい？」

美咲「難しい問題ですね。ゆっくり考えてみないと」

智史「うん」

美咲「一生かかって考えてみます」

智史「そう？」

美咲「ええ。答えが出たとき、また訊いてくれますか？」

智史「いいですよ」

深く考えずそう答えて、少し顔を赤らめて俯く彼女の仕草で、はっと気付いた。なにか、すごく深い意味のある言葉だったような気がする。

関係性： 結婚紹介所で出会った男女	感情：好（好き）、昂（緊張）
場面：デートの最中	伝達：△

（市川、p. 152）

この例も（11）と同じく、自らのフェイスが侵害されないように間接的な表現を利用したものである。美咲は智史に対して淡い好意を抱いているが、結婚相談所で出会ったという経緯もあり、ふたりの仲はまだまだ未熟なものである。そのため、直接的な言葉で好意を伝えた場合、相手の反応によっては自らのフェイスが侵害される可能性も大いにある。こういったリスクを回避するために、下線部のような間接的に好意を伝える表現が利用されたのであろうと考えられる。また、表右下の伝達が△となっているのは、波線部の地の文に「深く考えずそう答えて、少し顔を赤らめて俯く彼女の仕草で、はっと気付いた。」とあることから、美咲に関する視覚情報が智史の発話の理解に大きく影響を与えていることが分かるためである。仮にこの間接的感情表現が非対面の場面で行われていたとしたら、智史は真の理解にはたどり着かず、伝達は失敗していたかもしれない。

このように、（11）・（12）の両例からは、相手に伝えたい気持ちが

あるが直接的な言葉で伝えるにはリスクが高い場合に利用される、フェイス侵害を回避する形の消極利用を考察することができた。また、こういった場合、表現に含まれる感情は必ずしも負の感情には限られないということが判明した。直接的な言葉を避けたい、という点については恐れや緊張といった負の感情が含まれているとも言えるが、これらの例のように直接的な言葉を避けたい理由に相手への好意が前提的に存在しているものも多くあるのではないかと考えられる。

3.2.2 間接的感情表現の積極利用

3.2.1 では、仮説 1 を支えるサンプルとして、間接的感情表現の消極利用についていくつか例を取り上げた。その一方で、間接的感情表現の中には積極利用の例も一定数見られることが研究を進めるうちに明らかになってきた。したがって、この項では 3.2.1 で挙げたサンプルとは対照的な、積極利用のサンプルについて取り上げる。

(13) 渋谷「村川さんとは、前からの知りあい？」

(中略)

佐原「なんで急に、そんなこと聞くの」

上目遣いで、ちょっと拗ねてみせる。俺は顔面の筋肉を「かわいくてたまらない」というふうに変形させ、彼女の頭を撫で

てやった。

関係性：恋人	感情：怒（不機嫌）、厭（嫌）
場面：デートの最中	伝達：○

（三浦、p. 163）

まず、最初に挙げるのはあえて間接的感情表現を利用することによって自らの狙った何らかの効果を相手に与えるという積極利用の例である。(13)は恋人同士の会話であるが、これを第三者の視点から捉えた場合、渋谷の問いかけに対して佐原に求められているはずの回答は肯定または否定をすること、もしくは友人である村川とのエピソードを渋谷に話して聞かせることであると考えられる。しかし、佐原にとって重要なのは渋谷の問いかけに答えることよりも、渋谷の問いかけの内容に自分が嫉妬しているということを渋谷に伝えることであったためにこういった発話になったと推測できる。もちろん、字義通りに意味をとり、純粹に問いかけの理由が知りたいが故の発話だと考えられなくもない。しかし、その後の地の文では佐原が明らかに渋谷に媚びている様子が描かれており、渋谷も問いかけへの回答を急かすより先に恋人らしく甘えてくる佐原に対応していることが分かる。そのため、発話者の佐原は自分以外

の女性の話題を出してくる渋谷に対して嫉妬していることを伝達するという狙いがあるって間接的感情表現を利用し、かつその狙い通りの効果を受信者の渋谷に与えることができていると考えることができるのである。

(14) 波 「そうねえ。でもやっぱり主婦ってほとんどが自己犠牲の人生になっちゃうんじゃないかしら。そうでもないですか、優美さん？」

突然、波が私に顔を向けた。

優美「え？」

自己犠牲……。そうだろうか。自分で自分のことをそう思わないことがないわけではないけれど、他人から「アンタの人生は自己犠牲だ」とは思われたくない。とくにこんな、「自分はそうではない」と自慢たらしき言いたがる女には。

(中略)

優美「ホント、自己犠牲だらけの人生よ、主婦なんて」

私は笑って応えてやった。

(中略)

波 「そうですよねえ。主婦はつらいですよねえ」

波がさらに同意を求めてくる。私は笑顔を保ったまま言葉を続

けた。

優美「でも、自分を犠牲にしなきゃわからない喜びっていうのも
ありますからね。きっと波さんなんかには理解していただ
けないだろうけど」

言ってしまった。でもここで感情的になったら私の負けである⁷。

冷静に。冷静に。

優美「波さん、婚約していらっしゃるんですか？」

波「あ、ええ。一応。でも彼が今、転勤でニューヨークに行っ
たきりなので、結婚の見通しは立ってないんです」

優美「それはよかった。じゃ、自己犠牲人生は当分見送りできる
ってわけだ」

波「そうなんですよ。こないだまではそれが不満だったんです
けど、最近、仕事が面白くなってきちゃったんで、結果的
にはそのほうがよかったかなあって」

あくまでも無神経な女である。

関係性：友人の友人同士（※）	感情：怒（憤る）
場面：初めての会話	伝達：×

⁷ 二重下線部は取り上げる表現以外で着目すべき箇所を指している。

次に挙げる例もあえて間接的表現を選択し、利用している例である。表左上の関係性に※をつけたのは、波からすると優美は自分の友人の知り合いであり、初対面の相手であるのだが、実は優美からすると波は自分の夫の不倫相手の姉であるという複雑な関係であるからである。つまり、この場面においては優美だけが一方的に波を知っていたということになる。このように、元々波のことをよく思っていなかった優美は波の発話に対して憤りを覚えながらもあえて笑顔でその内容を肯定し、その後自嘲するような体を装って皮肉的に波を攻撃している。この場面において、着目すべきは二重線部の優美側からの地の文である。ここからは、なぜ優美があえて皮肉的な言い回しを選択したのかが読み取れる。すなわち、優美は平常状態の波に対してあからさまな怒りをぶつけるのは体裁が悪いと考えてはいたが、それでも自分の気持ちを抑えきれなかったため、結果としてあからさまに感情を表現せずとも自分の怒りを表出させられるという効果を狙ってこの皮肉表現をあえて選択したのだということが言えるのである。また、発話直後の波線部には「言ってしまった」という表現があり、そこからどうしても言わずにはいられなかったという優美の心境をうかがうことができる。しかし、結局のところ、最後の波線部にもあるよ

うに波には意図が伝わっておらず、伝達は失敗に終わっている。

このように、(13)・(14)の両例からは、発話者が何かしらの狙いを持って、あえて直接的な表現ではなく間接的な表現を選択し発話している、という形式の積極利用の例を見ることができた。また、感情に着目すると、(13)(14)ともに負の感情を含んでいたが、発話者の狙いによって含まれる感情は多様であることが予想されるため、一概に負の感情の例ばかりであるとは言えない。

(15) 幹也 「あなたのことは、有沢からときどき聞かされてますよ」

幹也が言い、理沙子は顔を上げた。

理沙子 「あら、どんなふうにな？」

すかさず亮が口を挟んだ。

亮 「もちろん、美人で気立てがよくて俺には過ぎた恋人だっけさ。な、氷川、そうだろう」

(中略)

理沙子 「それで、実際に私を見て、どうお思いになった？」

幹也はしばらく理沙子を見つめた。

幹也 「そうだな、有沢の言葉は嘘だって思いましたよ」

理沙子 「え……」

幹也 「有沢が言っている以上だったから」

理沙子は思わず口元をほころばせた。歯が浮くようなお世辞にはうんざりだが、こんなスパイスの効いた言葉は心地いい。

関係性：初対面の男女	感情：喜（快）、好（好き）
場面： 彼氏の同僚に初めての挨拶	伝達：×→○

（唯川、p. 10）

さらに、(15) では、あえて誤解を招くような間接的表現を用いることによって自らの発言をより印象的に思わせるという積極利用の例が見て取れる。有沢（亮）は理沙子の恋人であり、同僚の幹也には理沙子のことを非常に優れた女性であると紹介していたということが会話の冒頭で全体の共通概念となっているという点に着目してほしい。この前提のうえ、理沙子は幹也の「有沢の言葉は嘘だって思った」という発話を受けたため、幹也は自分が有沢の言うようなプラスの評価を受ける女性ではないと感じたのだと理解し、ショックを受けていることがその後の反応から読み取れる。しかし、幹也がその後続けた発話から、幹也の理沙子に対する評価は全く反対であったこと

が判明し、理沙子は不意をつかれて思わず素直に喜びをあらわにしている。この理沙子の反応から、幹也が利用した間接的感情表現の効果は的確に伝わっており、非常に意義のあるものであったということが分かる。加えて、二重下線をひいた箇所に着目すると、ただ直接的な表現で褒められるよりもこうして間接的な表現を駆使して褒められた方が気分がいいという理沙子の感情が描かれており、こちらからも幹也の発話をもたらした効果の大きさが読み取れる。

このように、(15) の例からは間接的感情表現をうまく利用することで同じ内容を伝える発話であっても相手へ与える印象を大きく変化させられるという積極利用の新たな可能性を発見することができた。また、この場合、含まれる感情は好意的なものが多くなると予想される。

3.3 仮説 2 に対する考察

2.2 では、序章で掲げた〔仮説 2：間接的感情表現の伝達の成否には受信者が事前に持つ発話者への印象が強く影響している。〕といった考えに至った理由として、感情表現は非感情表現と比べ、言語化が主観的になりがちであるという論を挙げた。ここでは、実際にサンプルを検証し、感情を含む間接的表現を伝達する際に特有の成否に関わる条件や重視すべき項目について迫りたい。

3.3.1 伝達成功の場合

それでは、まずは伝達が成功している場合について考察したい。3.2の考察で用いたサンプルをみると、そのほとんどが伝達に成功している。そこで、注目すべきは発話者・受信者の関係性である。(8)・(9)は友人、(10)は同棲中の男女、(11)～(13)は恋人と、どの例も相手のことはすでに誤解なく知り尽くしている仲だと言えるような関係性であることが分かる。また、(15)は初対面のふたりの会話であるが、この場合、発話者の幹也は一方向的に受信者である理沙子のことを知っているが理沙子は幹也のことを知らない状態で発話を受けている。そのため、受信者の発話理解は発話者に対する事前の印象に影響を受けずに行われていると考えられる。

したがって、これらの例から考えると、伝達が成功している表現はどれも受信者が発話者に対する偏った印象に左右されることなく発話理解が行われているということが言えるのである。

3.3.2 伝達失敗の場合

では、前項とは反対に、伝達が失敗している例についても考察していきたい。

(16) そうしたら、「村川くん」と声をかけてくるやつがいる。振

り返ると、隣のクラスの篠原椿が重そうな学生靴を手に提げて立っていた。椿なんて女みたいな名前だが、ガタイのでかい男で、しかもいつもなんだかおどおどしている。おとなしい性格のわりに学校中の有名人なのは、その名前と見た目のギャップと、あとは成績がすごくいいからだ。

(中略)

呼人「なに、なんか用」

(中略)

椿 「村川くん、バイクに乗ってるんだね」

優等生らしく教師に告げ口でもする気だろうか。俺は警戒して黙っていた。椿は慌てたように、つかえつかえしゃべりまくる。

椿 「あの、あの、違うんだ。ちょっと見せてほしいなって思
って。いや、乗せてもらえたらもっといいんだけど。俺
は母に『危ないから』って買ってもらえなくて、それで
村川くんが乗ってるのを知って、あの」

関係性： 隣のクラスと同級生	感情： 昂（興奮）、好（あこがれる）
場面： 初めて会話を交わすふたり	伝達：×

（三浦、p. 123-124）

最初に取り上げるものは、まさに受信者が発話者に対して抱えていた一方的な印象が間接的感情表現の理解に悪影響を与えてしまった例である。受信者である呼人（村川）と発話者である椿は同じ学校の同級生ではあるが、特に接点はなく、この会話以前は言葉を交わしたことが一度もなかったようである。ただ、お互いの存在はすでに知っており、二重下線部からは呼人が椿に対して「いつもなんだかおどおどしてい」て、「おとなしい性格」、そして「成績がすごくいい」という印象を持っていたことが読み取れる。そのため、自分が高校生の年齢でバイクに乗っていることを椿に知られていることが分かった時点で、椿は社会的なルールを違反している自分のことを好意的に思っているとは少しも考えなかったということが「優等生らしく～」という地の文からも見て取れる。その後の展開を読むと、実は椿は呼人の乗っているバイクに強く興味を持っており、自分もそれに乗せてほし

いというお願いをするための発話であったことがわかるのだが、最初の発話の時点では伝達は失敗に終わっている。加えて着目すべきは、樫の発話内にある二重下線部、「あの、あの、違うんだ」という箇所である。この発話は、樫がほとんど初対面だった呼人による自分への印象を理解しており、自分の発話がどういう風に理解されたのかを察しているということを表している。つまり、元々持っている相手への印象を重視することは受信者が間接的感情表現を理解することに対してだけでなく、発話者が受信者の理解過程に何らかの予測を立てることに対しても大きく関わってくるということが言えるのである。

(17) 加藤 「ねえ、ちょっと静かにしてくんないかな、けっこううるさいんだけど」

その時、少し離れたところにいた同じクラスの加藤彰彦が、きつ、と顔を上げて不機嫌そうな声で言った。

由紀夫「へ、すみません」

由紀夫は肩をすくめた。加藤はクラスに必ず一人か二人はいる、地味で社交性がなく冴えないが、その割に自意識過剰で自尊心が強い、というタイプの男子生徒である。つまり、由紀夫のようなタイプの生徒にはおよそ理解できない類の人物だ。

(中略)

こいつなんて、どう見ても勉強しか取り柄がなさそうだけど、それも秋みたくホントに頭がいいっていうんじゃないかと、めいっぱいガリ勉してって感じだもんなあ。秋は見た目もかっこいいし、(中略) スポーツもできるし――

由紀夫「うーん、世の中って不公平だなあ」

思わず口に出してしまった最後の一言を自分に対する嫌味ととったらしく、加藤は怒りで真っ赤にした顔をギロリと由紀夫に向けた。

由紀夫「おおこわ。秋、行こうぜ、もう昼メシだ」

関係性：クラスメイト	感情：驚（呆然）
場面：教室での会話	伝達：×

(恩田 (i)、p. 56-57)

さらに次の例では、受信者が発話者に持たれているであろう自らの印象を一方向的に決めつけてしまっていることからひねくれた解釈を行ってしまったという形の伝達失敗の過程を見ることができる。由紀夫は加藤に注意を受け、加藤と同じく頭のいい友人である秋のことを考える。なんでも要領よくできてしまうクラスのムードメーカータイ

プの秋と加藤を比べ、思わず零した言葉が下線部の間接的感情表現である。受信者である加藤は「地味で社交性がなく冴えないが、その割に自意識過剰で自尊心が強い、というタイプの男子生徒」であると由紀夫から評されており、おそらく加藤自身も自分が派手な人間ではないということでは少なくとも自覚していたのだと思われる。こうして、自分でもどこか引け目に感じている節があったからこそ、周囲は自分に対して勉強だけが取り柄のつまらない人間だと思っているのだと思い込んでしまったことが発話の理解に大きく影響を与えてしまったと推測できる。この場面において、由紀夫は加藤を傷つけてやろうと故意に発話をしたわけではないことは二重下線部から明らかである。しかし、由紀夫に少し見下されているように思い込んでいた加藤からすると由紀夫の発話は自分に対する攻撃であるとしか考えられなかったのであろう。

一方、この例からは間接的感情表現の伝達の成否に関わる別の要素も取り上げることができる。それがこの会話の冒頭にある加藤の「不機嫌そうな声で」という描写である。加藤は由紀夫の問題の発話を受ける少し前の段階ですでに彼によって心を乱されており、それが間接的な発話に対する解釈をよりマイナスなものにさせたのではないかと考えることができるのだ。

(18) 秋 「どしたの、それ」

由紀夫「へっへー、花宮がオレに編んでくれたんだー。オレ嬉しくって、ゆうべねらんなかったよ」

由紀夫はでれでれして、心の底から幸せそうである。

秋 「ほんとにおまえって奴は羨ましい奴だよなー」

秋はしみじみと由紀夫の顔を眺めた。

由紀夫「そーだろ、そーだろ」

由紀夫は秋の台詞を別の意味にとったようである。

関係性：同性の友人	感情：驚（呆然）
場面：登校中の会話	伝達：×

（恩田（i）、p. 266-267）

次の例は、先ほど（17）の考察で述べた受信者の心境が伝達に影響を与えている例である。これは由紀夫が最近付き合い始めた花宮という彼女から手作りのマフラーをもらった翌日の会話であるのだが、先ほども少し触れたように由紀夫と秋は非常に仲のいい友人であり、由紀夫は花宮が自分の彼女になってくれて大層喜んでいることを秋も知ってくれているということを自覚している。また、秋も由紀夫がそういう状態にあることは知っており、この点だけ考慮すると二人の

お互いに対する前提情報は十分であったと考えることができる。つまり、伝達失敗の要因は相手への印象というところには見受けられないのである。そこで着目すべきが由紀夫の態度である。「でれでれして、心の底から幸せそう」という地の文から、由紀夫は秋の発話を冷静に理解できる心境になかったということが読み取れる。この受信者・由紀夫の平静を欠いた状態が伝達失敗の一番の要因であると考えることができるであろう。

このように、(16)～(18)の3つの例からは、発話者への元々の印象が伝達に影響を与えているもののほかに、間接的感情表現の発話に至るまでの段階ですでに受信者の心境が平静なものではなかった場合、その後の発話理解に影響がみられるという伝達の成否に関わる新たな例も発見することができた。

第4章 結論

本稿では、間接的感情表現という新たに定義づけた表現の利用と伝達について、2つの仮説を立て、それらを検証することで研究を進めてきた。前章では、実際にサンプルを用い、それぞれの仮説に対応する考察を行った。ここでは、それらの考察をまとめ、この研究において最終的に明らかになったことを結論づける。

3.2では、一つ目の仮説である「間接的感情表現は積極利用よりも消極利用の方が意義に適った利用方法である。」という考えに対する検証を行った。実際にサンプルからは、仮説で述べたような、自分の立場を守ったり体裁を整えたりするという保身目的の利用や、相手に伝えたい気持ちがあるが直接的な言葉で伝えるにはリスクが高い場合のフェイス侵害の回避目的の利用といった形式での消極利用を観察することができた。しかし、サンプルの中には消極利用の例ばかりではなく、積極利用の例も少なからず見受けられるということが判明した。加えて、積極利用の中には何気ない会話を恋人とのコミュニケーションに利用する例や自分の体裁を保ちつつも相手を攻撃するために利用する例、さらには自らの発話内容をさらに印象的に演出するために利用する例というようにさまざまな場合が存在することも新たな発見であった。

3.3では、二つ目の仮説である「間接的感情表現の伝達の成否には

受信者が事前に持つ発話者への印象が強く影響している。」という考えに対する検証を行った。伝達が成功している表現を含む例を観察すると、どの例も受信者が発話者に対する偏った印象に左右されることなく発話理解が行われていることが分かった。一方、伝達が失敗している表現を含む例の中には、発話者への元々の印象が受信者の理解に悪影響を与えており、それがきっかけとして伝達が失敗に終わっている例も予想通り見受けられたが、その反面、間接的感情表現の発話に至るまでの段階ですでに受信者の心境が平静なものではなかった場合、その後の発話理解に影響がみられるという例の存在も確認することができた。

以上より、間接的感情表現について、利用という側面からは間接的な発話が直接的な表現を避けるためだけのものではなく、能動的に利用することにもまた意義がある表現であるという結論に至った。また、伝達という側面からは受信者の発話者に対する一方的な印象は間接的な発話の理解の妨げになる恐れがあるが、伝達が失敗する際の要素はそれだけではなく、発話を受けた時点での受信者の心持ちも理解に大きく影響を及ぼすことがあるという結論に至った。

参考文献

- 安達太郎 1999 『日本語疑問文における判断の諸相』(Frontier series 日本語研究叢書 11) くろしお出版
- 今井邦彦 2015 『言語理論としての語用論 ー入門から総論までー』
開拓社
- 大堀壽夫編 2004 『認知コミュニケーション論』(シリーズ認知言語学入門第6巻) 大修館書店
- 岡本真一郎 2013 『言語の社会心理学』 中央公論新社
- 北村英哉・木村晴編 2006 『感情研究の新展開』 ナカニシヤ出版
- 小泉保編 2001 『入門語用論研究 ー理論と応用ー』 研究社
- 中村明編 1993 『感情表現辞典』 東京堂出版
- ブラウン, P. & レヴィンソン, S. C. 2011 『ポライトネス ー言語使用における、ある普遍現象ー』(田中典子監訳) 研究社
- 山岸明子 2007 「老人と少年の交流がもたらすもの ー2つの小説をめぐる発達心理学的考察ー」 『医療看護研究』3(1) 102-108

参考資料

阿川佐和子 2010 『婚約のあとで』 新潮社

有川浩 2013 『植物図鑑』 幻冬舎

Grice, H. P. 1989 *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press.

市川拓司 2007 『そのときは彼によろしく』 小学館

Levinson, S. C. 1983 *Pragmatics*, Cambridge University Press.

三浦しをん 2007 『私が語りはじめた彼は』 新潮社

恩田陸 (i) 2001 『六番目の小夜子』 新潮社

恩田陸 (ii) 2013 「水晶の夜、翡翠の朝」『青に捧げる悪夢』 5-55

角川書店

Thomas, J. 1995 *Meaning in Interaction : an Introduction to Pragmatics*, Longman.

辻村深月 2011 『太陽の坐る場所』 文藝春秋

唯川恵 1999 『あなたが欲しい』 新潮社

要約

本稿では、「間接的感情表現」と名付けた特定の表現について、その利用と伝達といった二つの観点から研究を行った。

間接的表現とは語用論研究で中心的に扱われる字義通りではない、文脈依存した意味を含意している表現のことを指している。語用論の分野では、オースティンやグライスといったさまざまな言語学者がこの表現についての論を展開してきた過去がある。また、それらの理論を活用した研究が、言語学はもちろん、脳科学や心理学、さらには広告学といったさまざまな角度からなされている。しかし、本稿のように感情を含む表現に特化した研究はなく、ここから本稿の独自性が確保されている。

先述した内容を前提として、第1章では改めて間接的表現の定義づけを行い、グライスによる協調の原則に関連するものや間接的言語行為という分野に分類されるものといった、さまざまな具体例を参照した。また、この章では間接的表現の意義についても考察した。ここでは、伝達失敗のリスクを背負ってまで間接的な表現を利用する理由として、発話の取り消しができる、フェイス侵害を回避している、そして、情報伝達の効率化を図っているという間接的表現特有の3つの特徴を取り上げ、これらを間接的表現の意義として結論づけた。さらに、

同表現の伝達についても、過去の論を参照した。ここでは、本文中の図にもあるように、いわゆる常識である一般的知識、特定の発信者・受信者にのみ適用される個別的知識、そして、個々の価値判断の背景である文化コンテクストの3点を両者間で共有することによって、方向性の正しい推論が遂行され、結果として発話者の意図した内容が的確に受信者に理解されるという間接的表現の伝達成功のパターンが考えられることから、間接的表現の伝達には発話者・受信者に共通の文脈が必要不可欠であり、伝達を円滑に成功させるにはお互いにその文脈を意識することが重要であるということが判明した。

第2章では、本稿の研究題材である感情を含んだ間接的表現を間接的感情表現として新たに定義づけ、その具体例として、後の分析にも使用する、創作物から採取したサンプルの一例を示した。また、感情を含む表現であるからこそ考えられる同表現の意義についても考察した。その結果、こういった表現は自分が断言して伝えづらい内容や、相手の反応に自らのフェイスが侵害される可能性が高い内容を伝達する際に利用されやすいのではないかという考えに至った。このように、直接的な表現を避けるために受動的に間接的な表現を利用する場合を「間接的感情表現の消極利用」とし、この対にあたる、あえて間接的な表現を能動的に選択し利用する「間接的感情表現の積極利用」の場合と比べると消極利用の方がより意義に適った利用方法である

という仮説を提案した。さらに、間接的感情表現を伝達という観点から捉えると、表現に感情を含んでいる分、一般の間接的表現よりも内容が主観的になりがちであることから、受信者が発話者自身を理解している度合いによって表現の解釈が大きく変化する可能性があるという仮説も導き出すことができた。

ここまでの流れを受け、第3章では実際に創作物から採取したサンプルを使用し、前章で立てた2つの仮説について分析を行った。また、その結果が第4章にまとめられている。仮説1の「間接的感情表現は積極利用よりも消極利用の方が意義に適った利用方法である。」については、実際に保身目的の利用やフェイス侵害の回避目的の利用といった形式での消極利用を観察することができたが、サンプルの中には消極利用の例ばかりではなく、積極利用の例も少なからず見受けられるということが判明した。加えて、積極利用の中にも自分の体裁を保ちつつも相手を攻撃するために利用する例や自らの発話内容をさらに印象的に演出するために利用する例というようにさまざまな場合が存在することも新たな発見であった。仮説2の「間接的感情表現の伝達の成否には受信者が事前に持つ発話者への印象が強く影響している。」については、伝達が成功している表現を含む例を観察すると、どの例も受信者が発話者に対する偏った印象に左右されることなく発話理解が行われていることが分かった。一方、伝達が失敗している

表現を含む例の中には、受信者の発話者に対する理解不足が原因で伝達が失敗に終わっている例も予想通り見受けられたが、その反面、間接的感情表現の発話に至るまでの段階ですでに受信者の心境が平静なものではなかった場合、その後の発話理解に影響がみられるという例の存在も確認することができた。

以上より、本稿では、間接的感情表現の利用と伝達について、利用という側面からは間接的な発話が直接的な表現を避けるためだけのものではなく、能動的に利用することにもまた意義がある表現であるという結論に至った。また、伝達という側面からは受信者の発話者に対する一方的な印象は間接的な発話の理解の妨げになる恐れがあるが、伝達が失敗する際の要素はそれだけではなく、発話を受けた時点での受信者の心持ちも理解に大きく影響を及ぼすことがあるという結論に至った。